

私が大学1年生の頃に、千代正明先生からお伺いしたのは、司書になりたいのであれば、民間企業で接客のアルバイトをして下さいと言うことでした。それを聞いて私は、民間企業の営業部で接客のアルバイトをしていたのですが、その中での経験は非常に面接に生かしたのではないかと考えています。私は数回しか面接をしていないのですが、面接で緊張して喋れないことはありませんでした。経験した面接の4回中3回は合格を頂きました。目を見て、笑顔で、明るく元気に喋れるだけで、かなり印象は違ってきます。そのスキルを手に入れるために、人と接するのが苦手な方は是非、接客のアルバイトをしてみてください。

あとは、受ける自治体の図書館の研究、政策の研究はきっちりとして下さい。ちなみに私は最終合格を頂いた第一志望の地方自治体の図書館全てに足を運び、実際に見たことや、それから派生してこんなこと考えたと言うことを、面接では主にお話しました。全てに足を運ぶ受験生は初めてですとお伺いしましたので、それくらいの熱意を持って面接に臨めば、印象もよくなるかもしれません。

おわりに

この体験記は、あまりかしこまらず、等身大の私として書かせて頂きました。少しでも、私の体験記が司書を目指す立教生の方のお役にたてたら非常に光栄だと感じています。

就職体験記を書いてみませんかとお話を下さった永田先生、中村先生、貴重な機会を頂きました。どうもありがとうございます。

司書教諭就職活動体験記

金 美智子 (21世紀社会デザイン研究科博士前期課程3年)

私は、2013年4月より、私立中高一貫校の女子校にメディアセンターの専任司書教諭として勤めることになっています。同校は、東京都世田谷区にあるキリスト教主義の学校です。メディアセンターには約9万冊の蔵書があり、専任司書教諭が3名いるという大変恵まれた環境となっています。

1. 学校図書館員を目指した経緯

幸いにもこのような環境で働けることになった私ですが、学校図書館で働きたいと長年思ってきたわけではありません。母校の小学校、中学校は「人」が常時いる学校図書館ではなかったため、専任の司書教諭やいわゆる学校司書のいる学校もあるということを知らずに過ごしました。学校図書館専任で働くということは、最近まで私の思考のなかに全くなく、目指し始めたのはここ1年半ほどです。

大学入学時は教員志望だったので、学部生のときに中高の教員免許を取得し、あわせて司書教諭資格も取得しました。このとき司書教諭課程を受講し始めたのは、多少なりとも教員になるのに有利になればという期待と、読書が好きという程度の安易な気持ちでした。

専任の司書教諭になるとは当時思ってもいませんでしたが、図書館の仕事には関心を持ったので、大学院進学と同時に図書館（指定管理の区立図書館）でアルバイトとして働き始めました。1年間働いて図書館の仕事の面白さを体感し、やはり司書資格も取得したいと思い、立教の司書課程を受講し始めました。そして図書館現場での実務と司書課程での学びを並行していくなかで、学校図書館員を本気で目指そうと決めました。その理由は、もともと学校教育に関心を持っていたことと、学校での学びの中核として学校図書館が機能することが学校教育、ひいては社会をよりよくする手段のひとつになると考えたからです。その後アルバイトを学校図書館（公立の小中学校での複数校勤務）に変更し、現場での経験を積みながら就職活動をしました。

以上のような私の志望の経緯は、学校図書館員を目指す皆さんの直接の参考にはならないとは思いますが、志すようになった理由をきちんと説明できるかどうかは、応募書類でも面接でも重要なポイントになるはずです。特に公務員試験を受けて正規の学校司書になるルートの他は、最初は志望動機等を記した書類による選考が実施されることが多いので、次の筆記試験や面接試験に進めるかどうかに関わってくると思います。

2. 内定までの経緯

次に、私が内定をいただいた学校の採用試験の概要やそのために行った対策について述べます。選考は、書類選考、論述試験、筆記試験、面接、最終面接で行われました。論述、筆記、面接はすべて1日で実施され、面接は管理職の先生方の面接と司書教諭の先生方の面接の2種類がありました。

論述では、同校のキリスト教教育にどのような姿勢で携わるか、教員集団の中で活かせる自分の長所は何か、といった教員としての資質を問うような設問が3題あり、50分間の試験でした。筆記は、調べ学習で教えるべき事柄や学校図書館でのSNSの扱いの是非といった司書教諭としての資質を問う問題4題で、40分間でした。

学校によって選考のプロセスや求める人物などは異なると思いますが、対策に関して確実に言えることは、学校についての情報収集が必須だということです。学校図書館員を目指す人は、とにかく学校図書館で働きたい一心で、学校そのものの特色や教育方針などについての関心は低くなってしまいがちかもしれません。しかし、学校図書館は学校の中にある図書館なので、その学校について理解することは欠かせません。また、採用する学校側も、学校図書館員というよりは教職員の一人という認識で選考を行うのではないかと思います。

したがって、どうして学校図書館で働きたいのかということだけでなく、なぜこの学校なのか（他に多くの学校があるなかで、なぜここなのか）ということも、説明できるようになる必要があります。私の場合は、学校案内に目を通すのはもちろん、創立者について書かれた本を読んだり、キリスト教主義の教育や男女別学について調べたりして、考えを深めました。

3. 普段から心がけたこと

先に記したのは私が受けた選考への対策ですが、学校図書館員になるために普段から行っていたことがいくつかあるので挙げておきます。

① できるだけ多くの図書館を訪問する。

参考になる点、反面教師になる点を探す。

② 図書館に関連する情報を収集する。

雑誌やウェブサイト・ブログの閲覧、講演会・シンポジウムへの参加など。

③ 図書館に直接関係ないと思われることでも、図書館に関連づけて考える。

例えば、ビジネスの番組を見るときでも図書館サービスに参考になる部分はないかという視点で見てみる。

④ 知識の定着を確認する。

図書館情報学検定試験の受験など。

そのほか、立教大学図書館主催のオンラインデータベースの講習会など、図書館員として役に立ちそうなことにはできるだけ参加するようにしました。また、図書館は古今東西のあらゆる知が集まる場所であるにも関わらず、図書館のことばかり考えていると視野が狭くなっていくように感じたので、「タコツボ」に入ってしまうよう心がけました。

もちろん、上記をそのまま実行していただかなくて良いのですが、自分なりに日常的に努めていることがあると、採用試験の際にも生きてくると思います。

4. 求人情報の収集の仕方

学校図書館と一口に言っても、私立と公立、正規と非正規などによって、選考の仕方は異なりますし、求人情報を得られる主な場所も異なります。私はほとんどインターネットで収集しましたが、司書になりたい人ならよく知っている「われわれの館」と日本図書館協会の「図書館関係求人情報」のほかに、立教就職Naviや日本私学教育研究所の「教職員募集情報」、公的機関の求人を紹介しているブログ等をこまめにチェックしていました。公立の非常勤の学校司書の場合は、その自治体のHPに掲載されるので、目星をつけたところを定期的に見ていました。

様々なサイトをチェックするのは大変ですが、億劫がらずに定期的に見ているとこの自治体の学校司書の求人が何月頃に出るとか、この受託企業は頻繁に求人を出しているかといったことがわかってきます。実際に選考を受けるのはまだ先という人でも、チェックする習慣をつけておくと、いざというとき参考になるのではないかと思います。

5. 学校図書館員を目指す方へ

最後になりますが、学校図書館員の場合は一般企業と比較して求人が出る時期も実際の選考の時期も遅いため、焦りや不安がついてまわると思います。やっと募集があったと思っても欠員補充のごくわずかな人数で、ナーバスにならない方が不思議なくらいです。

それでも、学校図書館で働きたいという明確な意志があり、そのための学びも厭わない自信があるのならチャレンジする価値のある仕事です。これからの学校図書館、そして学校図書館の機能を活かした教育に携わる人が、立教から出てくれることを心から願っています。